コロナ禍に問う死生学
―“わたし”を生き、“わたし”を死ぬ―

大井 賢一

Japanese Journal of Clinical Thanatology
日本臨床死生学会　Vol.26　No.1　別刷

【複製禁】

コロナ禍に問う死生学
―“わたし”を生き、“わたし”を死ぬ―

大井 賢一

Ⅰ．プロローグ

わたしたちは38億年の生物進化の過程で、有性生殖による遺伝子組換えを獲得したことで、わたしたちに死が組み込まれた。

死が発現する瞬間まで生の時間を進めていけば、どこかで生と死は一枚のコインのように表裏一体になるはずだ。人類学者G・ゴーラーは著書『死と悲しみの社会学』で、死は性と同様の「口にはできないもの」となり、「多くは私的空想と半ば秘密のポルノグラフィー」としてタブー視されていると述べた[1]。それは生がコインの表で死がコインの裏であるかのようだ。他方、精神科医S・フロイトは著書『快感原則の彼岸』でわたしたちには生の欲動（Eros）と死の欲動（Thanatos）という二つの矛盾する欲動が内在していて、わたしたちは生きる情動と死への衝動を切り離せないと説いた[2]。生と死が切り離せない一枚のコインのように表裏一体だとすれば、「生きることと死ぬことは、その本質において等価である」という小説家の村上春樹の著書『ノルウェイの森』の一文が理のように響く[3]。しかし、生きている“わたし”に現前するのは“わたし”の生であり、決して“わたし”の死を見ることはできない。だからこそ、わたしは“わたし”を生き、“わたし”を死ぬのだ。

Kenichi OI
認定特定非営利活動法人がんサポートコミュニティー
（〒105-0001 東京都港区虎ノ門三丁目10-4　虎ノ門ガーデン214号室）

Ⅱ．“わたし”の死を問う無意味さ

哲学者V・ジャンケレヴィッチは、著書『死』の中で、死を文法範疇の人称を使い、“わたし（自分）”の死を一人称の死、“あなた（近親者）”の死を二人称の死、“誰か（他人）”の死を三人称の死として三つに区分した[4]。わたしたちが経験するのは、いつも誰か（他人）の死である。そこから必然性をもって帰結することは“わたし”も死ぬべき運命にあるかもしれないということに過ぎず、“わたし”が死ぬということではない。だからこそわたしたちは、いつか死ぬだろうと極めて曖昧に予感しつつ、今を生きている。

しかし、死は気まぐれでコインはいつ裏返るかわからない。『古今和歌集』に在原業平が詠んだ和歌「つひに行く／道とはかねて／聞きしかど／昨日今日とは／思はざりしを」が収載されている。業平が病気で弱ってしまった時に、死は誰しもが通る道と以前から聞いていたが、“わたし”の死が昨日今日に差し迫ったものだとは思いもしなかったと、病いを得て突如訪れた“わたし”の死ぬべき運命の確かさを綴っている。哲学者M・ハイデガーは著書『存在と時間』で死が訪れる時期が不確かであることはわたしが“わたし”の運命に無知であり、わたしの日常の意識に“わたし”の死が不在なのはこの無知によるもので、“わたし”の死は必ず訪れるがその時期が不確かなために不気味さがあると説いた[5]。わたしたちにとって死は日常の悪事のうち最恐とされている。

ところが、“わたし”が存在する限り、死は現に存在せず、死が現に存在する時には、もはや“わたし”は存在しないのだから死は何ものでもないと、古代ギリシアの哲学者エピクロスは“わたし”の死を問う無意味さを説いた[6]。

哲学者B・N・シューマッハは著書『Death and Mortality in Contemporary Philosophy』で、エピクロスのいう“わたし”の死（Death）にあって“わたし”は存在できないという事実と“わたし”が死ぬべき運命（Mortality）にあるという事実との間には大きな隔たりがあると指摘し、エピクロスの説く生と死の相互排他性と死を問う無意味さが21世紀の死生学に乗り越えがたい壁として立ち塞っているという[7]。

Ⅲ．コロナ禍が問う“わたし”の死

2019年2月に発売された埼玉医科大学総合医療センター奥信也客員教授の著書『Die 革命―医療完成時代の生き方』の表紙には“もうすぐ「死」は死語になる。”とあった[8]。医療イノベーションによって死の脅威をもたらす病気はすべて姿を消し、病気で人間が死なない不死時代が到来するだろうと予測していた。しかし、皮肉にもその年末に中国湖北省武漢市から新型コロナウイルスSARS-CoV-2が報告された後、その感染者数が激増し、2020年3月11日までに世界保健機関（WHO）が世界大流行を意味する“パンデミック”を宣言するに至った。東京オリンピック・パラリンピックは史上初めて延期となった。2022年1月11日現在、世界で約3億1千万人以上が新型コロナウイルスに感染し、549万人以上が死亡している。

コロナ禍にある今、“もうすぐ「死」は死語になる”というキャッチコピーに相対性理論を唱えた理論物理学者A・アインシュタインの「Two things are infinite, the universe and human stupidity, and I am not yet completely sure about the universe.（宇宙と人間の愚かさの2つは無限であり、宇宙についてまだ完全に確信していない。）」との言葉が痛烈な皮肉を浴びせる。この言葉はゲシュタルト療法の創始者で精神科医F・パールズが晩年に書いた自伝『In and Out the Garbage Pail』に彼がアインシュタインと過ごしたある午後の対話に描かれている[9]。

2020年3月29日に志村けん（70歳）、4月23日に岡江久美子（63歳）とテレビで活躍していたタレントが相次いで新型コロナウイルス感染症による肺炎で亡くなり、日本社会に衝撃を与えた。わたしたちの“わたし”の死についての日常の予感は、思想家P・L・ランツベルクが著書『死への経験』で語る「老いの最終的・自然的な死」であろう[10]。わたしたちは“わたし”の死は当然のこと、彼らの“誰か”の死も当然そうした死になるだろうと予見していただろう。しかし、事実はわたしたちの抱いた予見と違っていた。2020年1月から6月初旬までTwitterに投稿された新型コロナウイルス関連の約1億8,600万件を分析した東京大学大学院工学系研究科の鳥海不二夫准教授らによると、「怖」や「厭」などの負の感情が爆発した最大のピークは志村けんの死の直後だったという[11]。

新型コロナウイルス感染症が「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症予防法）」の定める指定感染症になったのは2020年2月1日で、国内初の死亡者が出たのは2月13日だった。2月25日に厚生労働省医薬・生活衛生局生活衛生課は同法第30条が「感染症の病原体に汚染され、又は汚染された疑いがある死体の移動を制限し、または禁止することができる」と定め、「24時間以内に火葬し、又は埋葬することができる」としていることから「新型コロナウイルスにより亡くなられた方の遺体の火葬等の取扱いについて」を通知した。

志村けんの死は新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、入院中も面会に行くこともできず、看病も看取りも叶わない、遺された家族が死別を受け入れるための心の整理に必要な“お別れの場”も持てない現実を露わにした。精神科医S・フロイトは著書『悲哀とメランコリー』で死別に適応するための「喪の作業」を挙げ、喪失の現実を受け入れるための“お別れの場”としての葬儀を挙げている[12]が、コロナ禍はその機会を奪った。

社会学者R・セネットは著書『不安な経済／漂流する個人－新しい資本主義の労働・消費文化』で、「不安は起こるかもしれないことと結びついている。怖れは起こっていることと結びついている。不安は不確実な状況において起こり、怖れは苦痛

や不運が確実なときに起こる」[13]と、恐怖と不安を区別した。コロナ禍にあって、わたしたちは“わたし”が新型コロナウイルスに感染するかもしれない、感染して“わたし”が死ぬかもしれないと不安を募らせ、コロナ禍にあって現実に世界で多くの“誰か”が感染して、多くの“誰か”が死んでいる事実から恐怖している。コロナ禍はわたしたちに死が確実に訪れる出来事である一方で、いつどのような形で起こるかは不確実だということを再認識させた。コロナ禍では死への恐怖と不安が同居し、それらが複雑にからみ合っているのだ。

この事実によって、わたしたちにとって他人である志村けんの死を三人称の死に留まらせず、二人称の死を想起させたのかもしれない。ジャンケレヴィッチは著書『死』の中で、「父あるいは母の死は、ほとんどわれわれの死であり、ある意味では実際にわれわれ自身の死だ」と、一人称の死と二人称の死は重なり合っているという[4]。アメリカのユダヤ教聖職者E・A・グロルマンも著書『愛する人を亡くした時』の中で、二人称の死について「愛児を失うと、親は人生の希望を奪われる／配偶者が亡くなると、ともに生きていくべき現在を失う／親が亡くなると、人は過去を失う」と、二人称の死は一人称の“わたし”にとっても人生の過去・現在・未来を失うのと同じだという[14]。志村けんの死は三人称の死から二人称の死、さらに一人称の死を想像させ、それゆえにその時にTwitterで負の感情が爆発して最大のピークとなったのではないだろうか。

Ⅳ. 予期する“わたし”の死、予期せぬ“わたし”の死

ハイデッガーは著書『存在と時間』で、“わたし”はいずれ確実に“わたし”が存在し得ない死を運命として自覚的に受け入れなければならないと説いた。ハイデガーはこのことを死への先駆的決意性（die vorlaufende Entschlossenheit）と呼んだ[6]。死への先駆的決意性によって、わたしは“わたし”の生の有限性に関わらざるを得ない。ハイデガーは死への先駆的な覚悟が“わたし”を生きてゆくための手段となるという。わたしは“わたし”の死を覚悟すると、限られた時間を無駄に過ごすことはできないという生活を送るようになる。仮に永遠に生きられるとしたら、今それをやるかどうかは重要なことではなくなる。いつかやればよいからだ。死がいつでも訪れ得るという状況にあって初めて、今それをなすべきかが切迫した倫理的な選択となる。

がんの告知はまさにその時だ。世界最大規模の国際的がん患者支援組織Cancer Support Community日本支部である認定NPO法人がんサポートコミュニティー創設者で、消化器外科医だった竹中文良は自らの大腸がん体験で“わたし”の死を予期したのではないか。竹中は1986年の自らの大腸がん体験を『医者が癌に罹ったとき』として著し、続編『続・医者が癌に罹ったとき』のエピローグで「癌で死ぬのもそう悪くない。癌体験者の強がりでいうのではない。」と著し[15]、「選べるならがんで死にたい」と公言していたことを思い出す。

がんは治らないとわかってからも死を迎えるまでには数年の猶予がある。今日の医療の進歩によって死の直前まで動くことができ、意識清明を保て、意思表示ができる。がんは“わたし”を生き、“わたし”を死ぬことができるかもしれない。わたしたちはわたしが“わたし”の死を迎える、その最期の時まで役に立ちたいと考えている。親は子どもに徐々に弱っていく自らを見せることが死の準備教育（Death Education）であり最後の役割だ。がんで死ぬことはそれらを満たしていると、かつて竹中は語っていた。がんは“わたし”の死を予期させる。

英国の人気ポップグループ「ガールズ・アラウド（Girls Aloud）」のメンバーとして活躍した歌手サラ・ハーディング（39歳）の公式Instagramが2021年9月5日に彼女の母親によって更新された。それは彼女の白黒画像に「It's with deep heartbreak that today I'm sharing the news that my beautiful daughter Sarah has sadly passed away.（今日、私の美しい娘サラが悲しいことに他界しました。）」と言葉が添えられていた。

彼女は2020年8月、乳がんで闘病中であることを公表。2021年3月に出版した自伝『Hear Me Out』のなかで、2019年12月に脇の下にしこりがあることに気が付いたが、コロナ禍で受診を先送

りした結果、発見が遅れてしまったと明かしていた[16]。

2018年1月31日、英国医学雑誌『Lancet』に発表された世界71か国における18種のがんを対象とする国際共同研究CONCORD-3によると、米国とオーストラリアで乳がんと診断された女性の5年生存率は90%で16の欧州西部諸国で85%に向上している[17]。

しかし、彼女にとって“わたし”の死は5年先、10年先に訪れるだろうものであって、それが受診を先送りにするという判断にも繋がったのかもしれない。しかし、コロナ禍は彼女の“わたし”の死を診断後2年という短く差し迫ったものに変えた。彼女はこの早すぎる“わたし”の死を予期して、まさに一枚のコインが裏返る“わたし”の死の瞬間まで“わたし”を生きることができただろうか。

V. エピローグ

わたしたちが死と向き合うことは、限りある生の時間と命の尊さに気づき、“わたし”を生き、“わたし”を死ぬことである。わたしたちは遺伝的に生きる時間が限られているが、日常生活でそれを意識することは少ない。

ギリシア語には、時間を意味するカイロス（καιρός）とクロノス（χρόνος）という二つの言葉がある。過去から未来へと続く量的な時間をクロノス、一度だけで二度と訪れない決定的な瞬間としての質的な時間をカイロスという。文学者F・カーモードは著書『虚構と時間』の中で、クロノスはこれまでに過ぎ去った時、これから待ち受けている時であり、カイロスは終わりとの関係から生じる意味を当てられた瞬間、意義に満ちた一時点であると説明している[18]。

クロノスという過ぎ行く日常を漠然と過ごしていたわたしたちは、新型コロナウイルスの爆発的感染や著名人の“誰か”の死の報に触れた時、その死を“わたし”の死として強く意識した。それは“わたし”の死という終わりを意識することで、わたしの生きる意味をも強く意識させる、意義に満ちた一時点であったかもしれない。

かつて竹中は自らのがん体験を振り返って、「がんになったことは不運であったけれども決して不幸ではなかった」と語った。わたしたちは今、コロナ禍に感染症の脅威に曝され、“わたし”の死を予期して恐怖したことは不運であったかもしれない。しかしコロナ禍にあって“わたし”の死を予期してクロノスという日常の時間のなかに、今ここにあるカイロスというかけがえのない瞬間を意識できたことは、“わたし”を生き、“わたし”を死ぬ死生学の意義をわたしたちに問いかけたのではないだろうか。

参考文献

1）G・ゴーラー：宇都宮輝夫訳：死と悲しみの社会学．ヨルダン社，東京，1986（Geoffrey Gorer: Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain. Cresset Press, London, 1965）

2）S・フロイト：井村恒郎，小此木啓吾他訳：フロイト著作集6．人文書院，京都，1970（Sigmund Freud: Jenseits des Lustprinzips. Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Wien, 1920）

3）村上春樹：ノルウェイの森（上・下）．講談社，東京，1987

4）V・ジャンケレヴィッチ：仲沢紀雄訳：死．みすず書房、東京，1978（Vladimir Jankélévitch: La Mort. Flammarion, Paris, 1966）

5）M・ハイデッガー：細谷貞雄訳：存在と時間（上・下）．筑摩書房，東京，1994（Martin Heidegger: Sein und Zeit. Max Niemeyer, Berlin, 1927）

6）エピクロス：出隆，岩崎允胤訳：エピクロス―教説と手紙―．岩波文庫，東京，1971

7）Schumacher, Bernard N.: Death and Mortality in Contemporary Philosophy. Cambridge University Press, Cambridge, 2011

8）奥信也：Die革命―医療完成時代の生き方．大和書房，東京，2019

9）Frederick S. Perls: In and Out the Garbage Pail. Real People Press, Lafayette, 1969

10）P・L・ランツベルク：亀井裕，木下喬訳：死への経験．紀伊國屋書店，東京，1977（Paul Ludwig Landsberg: Die Erfahrung des Todes. Matthes & Seitz Berlin, Berlin, 1973）

11）鳥海不二夫，榊剛史，吉田光男：ソーシャルメディアを用いた新型コロナ禍における感情変化の分析．人工知能学会論文誌35（4），2020．DOI: 10.1527/

tjsai.F-K45

12) S・フロイト：井村恒郎，小此木啓吾他訳：フロイト著作集6．人文書院，京都，1970（Sigmund Freud: Trauer und Melancholie. Internationale Zeidschrift fur arzriche Psychoanalyse 4, 288-301, 1917）

13) R・セネット：森田典正訳：不安な経済／漂流する個人－新しい資本主義の労働・消費文化．大月書店，東京，2008（Richard Sennett: The Culture of the New Capitalism. Yale University Press, London, 2006）

14) E・A・グロルマン：日野原重明監訳：愛する人を亡くした時．春秋社，東京，1986（Earl A. Grollman: What Helped Me When My Loved One Died. Beacon Press, Boston, 1982）

15) 竹中文良：続・医者が癌に罹ったとき．文藝春秋，東京，1995

16) Sarah Harding: Hear Me Out. Ebury Press, London, 2021

17) Claudia Allemani, Tomohiro Matsuda, Veronica Di Carlo et al.: Global surveillance of trends in cancer survival 2000-14（CONCORD-3）: analysis of individual records for 37 513 025 patients diagnosed with one of 18 cancers from 322 population-based registries in 71 countries. 391（10125）: 1023-1075, 2018. DOI: 10.1016/S0140-6736（17）33326-3

18) F・カーモード：虚構と時間．岩元巌，山形和美，岡本靖正編『小説の時間』所収．朝日出版社，東京，1975（Frank Kermode: The Sense of an Ending: Studies in the Theory of Fiction. Oxford University Press, Oxford, 1967）